
美貌の王子と年上の女

桜木春緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美貌の王子と年上の女

【Nコード】

N94810

【作者名】

桜木春緒

【あらすじ】

架空西洋中世風恋愛小説。ロティオール王国の第二王子の亡き母親は、国王の愛妾で宮廷の伝説と化している美女。その母に酷似していると噂に高い美貌の王子ラシャと、彼より10歳年上の、常に恋人が三人居るといふ男爵家の未亡人ナセアとが…。

（携帯閲覧用のための投稿につき「春想亭昼向」掲載のものと内容は同じです）

「ねえ、助けて…」と蟲惑に満ちた美しい女は言った。

「助けて、とはどういうことですか？」

「…そうね、また今度話すことにするわ」

女は高貴な血筋を持っている。

いま彼女の頬の下に居る男よりはるかに。

2年前は良かったと、ナセアは良く思う。

彼女の母親は、現王の庶腹の姉であつた。先の王に見初められた彼女の祖母は、王の湯殿の世話をするような身分の低い端下女ではあつたが、庶民にしては美しかったそうだ。

そしてまぎれもないロティオール王の胤を授かり、女兒を産んだ。それを王も認めてくれた。

そうやって生まれたナセアの母は、ロティオール国内の子爵家に嫁ぎ、4人の子供をもうけた。ナセアは三番目の娘で、美貌を謳われながら生い立った。

十代の半ばの頃から、さまざまの男性の目を引き、いくつかの浮名は流したものの、十八歳で無事にジェイ・グローセン男爵の奥方に納まることができたのである。

夫のジェイは6歳上で、若く美しいナセアを可愛がった。これほど愛らしい者を妻としたことを喜んだ。

つややかな褐色の髪に桜色の頬、秋の夕闇のような蒼の瞳。ふつくらした唇が少し尖っていて、どこか拗ねたように見えるが、そのために微笑んだときの変化が鮮やかで、彼女の印象を彩り豊かにする。

彼女自身は、夫を愛したとも愛していないとも、そのときには良

くわからなかった。

むしろ疎ましくさえ思ったかもしれない。

宮中の様々な催しでも以前のように男性たちにもてはやされることもなくなり、そういう輪の中に入ることも遠慮しなければならなくなっていた。結婚してから3ヶ月ほどの頃には、つまらないと思いはじめてさえいた。

その後、子供も生まれなかったが、それでもジェイはナセアをこよなく愛し、いろいろなわがままをも快く許していた。その少し男を振り回すような仕草を、むしろ愛すべき性情として彼は受け入れていたのだろう。

海を見たいといえば旅に付き合い、南国の真珠の髪飾りが宮廷の娘たちの間で話題になれば、それを購うために産出国へわざわざ使いを出して最新の細工の物を手に入れたり、馬車が地味だと言えば改造し、湯殿が狭いといえば広く改築をした。

浪費が過ぎると、執事が言っていることも、ナセアには聞こえないように彼は心を砕いていた。

そんな風に、言いなりの夫を愉しんでいたナセアなのである。

ジェイ・グローセンは取り立てて美男ではなく、少し猫背気味の中肉中背の、さして風采の上がった男ではない。彼女と結婚するまでは、服装も地味で趣味もよくなかった。

いざ結婚すると決まったときでさえ、その名前の男爵とはいったい誰だろう、とナセアが疑問に思ったくらい印象も薄かった。

そんな彼と、宮中の催しや他家の宴席にも一緒に行かねばならぬことをナセアは不満ですらあった。だから多少のわがままは言っても許されると思っていた。

なぜなら自分は結婚するまでは貴族の青年たちの憧れの的であったのだから、その自分を娶る幸せを得たのだから。

とはいえ、そんな彼とナセアの結婚生活も2年を過ぎるとそれは

それで安定して、ナセア自身も「こんなものかな」と思うようになった。ジェイがナセアに対して穏やか過ぎることが物足りなくはあったが、優しさのない男よりはずっと良いと思うようにしていた。相変わらずナセアがいろいろなわがままをジェイに仕掛けては、彼が困り顔をしながら応えることが習慣になっていた。それも二人の独特の心の交流であると、時がたつてナセアは気づいてきたのだ。そして、そうやってナセアに応えようと努力する彼にかわいらしさを見出し始めていた。

そんな安らいだ生活が破綻したのはナセアが二三歳、ジェイが二九歳のときであった。

ジェイが隣国サンサとの戦に行かなければならなくなったのだ。彼は以前にも一度出征している。貴族たちはそれが通過儀礼のように、義務として戦役を課されていたが、一度は義務を終えたジェイにも、長引く戦争のためにもう一度その役目が回ってきてしまったのである。

「嫌だわ」

ナセアはジェイの胸に頬を寄せながらそう言った。彼の胸は着衣の時に見るより、ずっと厚くたくましい。

「大丈夫。前に行った時にも危ないことはなかった。今度も無事に帰ってくるよ」

彼はそつとナセアの頬を両手で挟み、これほど愛しい者が居るのにどうして無事に帰らないことがあるだろうか、と言った。ジェイもそんな台詞めいた言い回しをするようになったのか、とナセアは意外に思った。

「サンサに行く前に、一緒に旅にでも行こうか？」

「美しい所が良いわ」

「南へ行こうか。レスフォの辺りの海は綺麗だと聞く」
それはどこなの、とナセアは聞いた。

ロティオール南端にある軍港の町の名前がレスフォということ

など、首都のキーウに生まれ育ち、そこからほとんど出た事のない彼女は知らない。

レスフォには王太子リデイスが先年より領主となって赴任している。もともと次代の王になる人間が治める習慣の土地であったから、それは順当な人事で特に話題にもならぬことだった。同時にレスフォの隣領の跡取りの絶えたソント公の名跡と領地を、庶腹の第二王子に王が与えたことも特に奇異なことではなかった。

ナセアとジェイは、レスフォを訪れ、まず最初に現在一七歳の若い王太子に、当地に数日滞在する旨の挨拶をした。

レスフォと言う街が思いのほか殷賑な都市であることをナセアは喜んだ。

軍港であると共に、海上流通の拠点であるために色々な国の様々な文物が集まっており、賑わいもたいへんなものである。

それでいて首都キーウほどには堅苦しくなく、南方の温暖な空気のためか、絶え間なくなだらかに吹く海風のためか、開放的な雰囲気だった。

その日はレスフォの領主館の一隅に宿り、翌日は、リデイスの勧めにしたがってレスフォの隣領のソントに行くことにしている。

「弟はまだ一三歳で、作法などわきまえませんが、ご容赦ください」とまだ一七歳になったばかりのリデイス王太子は言った。微笑ましい事だとナセアはソントへ向かう馬車の中でジェイに話していた。

レスフォを朝に出発し、左手にずっと淡く青い海の光を見ながら半日、ソントの領主館に到着する。

前日のリデイス王太子に対したように、ジェイもナセアも、領主であり現王の第二王子である一三歳のソント公ラシアヴィラムに丁寧に挨拶をした。なるほど兄であるリデイスがあらかじめ許しを求めたように、礼儀としてかけるべき言葉は彼からは出てこなかった。少年領主は眉の辺りに憂いを帯びながら、ただ無愛想に黙ってう

なずいただけであり、挨拶を受けながらも居心地の悪そうな落ち着きのない態度を改めることもない。

そのいささか無礼な少年の顔を見て、それでも、怒りがわくこともなく、ナセアもジェイも一時は言葉を忘れるほどに魅入られていた。

これが噂のラシャ王子か、と。

噂とは、彼の容貌に関してである。父親はいうまでもなく現口テイオール王のヴァルト・オーディアスで、既に亡き人になっている彼の母親は、現リコリス子爵の妹で名はファルミナという。

ファルミナは、未だに宮中の伝説と化している美貌の人であった。その母にラシャは酷似している、と彼を見た事のある人が言う。ナセアも、ジェイもそう思った。

ナセアがファルミナを見たのは幼い頃のことであったが、まるで絵の中から脱け出したような現実離れたような美しさだと印象があった。ジェイはもつと鮮明に覚えていて、ファルミナの切れ長の大きな眼の艶やかな光に、少年ながら憧れて止まなかったという記憶が残っていた。

「綺麗な子ね。ずっと眼を奪われてしまうようです」
とナセアは感嘆しきりであった。

そんな話をしながら二人が眺めのいい海辺を散歩している間に、遠くに見えた。

そのラシャが他の少年たちと共に無邪気に大きな声で笑いながら海に飛び込んでいく。それは、わんぱくなただの男の子そのものの姿であった。

「私にもあんなふうだった頃があるのだよ、と言って信じる？」

「うそ。ジェイはそれほど自分が綺麗だと思っただけ？」

「そうじゃなくて……」

手をつないで歩きながら、ナセアは、わかってます、と明るい声で

笑った。

ジェイもナセアに手を引かれながら、笑い声を重ね、そんな楽しい二人の声は海風に吹き飛ばされていた。

南への旅行から帰ってからほぼひと月の後。
ジェイが出征する日が来てしまった。

旅からの帰路の頃から、ジェイの口数が少しずつ減り、時折悩ましい表情を見せるようになっていた。仕方のないことだが、ナセアにはそれも心配をかきたてられるようで不満であった。

普通に二人で季節の話などしている間に、ジェイは不意にナセアを強く抱きしめたり、昼の日の高いうちから次の朝になるまで彼女を求め続けたり、そういう行動を取ることが多くなっていた。

無事で戻ってください、と時には口に出した。多くは心の中だけで、ジェイの厚い胸に抱きしめられながらナセアはそれを強く祈った。

愛している、とジェイは答えた。結婚してからナセアがお願い願っても照れくさがってなかなか口にしなかった言葉だった。

「ナセア、俺は女々しいだろうか？離れたくないんだ」

前夜からジェイの欲求に応え続けて朦朧としたナセアの耳に、夜明け近くに彼の泣く様な声が届いた。ナセアはただ首を横に振るだけしかできない。

国の命令で決まってしまったことを覆すことなどできるはずがなく、ナセアもジェイもただ従うだけなのだ。

まもなくジェイは彼女の元を離れて、サンサという異国の戦場に赴かねばならない。そしてナセアはジェイを遠方に連れていかれ、少なくとも一年は一人残されてしまう。

「ご無事で、どうか……」

その先のナセアの声は、ジェイの唇に遮られて続けられなかった。

それから三か月でナセアは未亡人となった。

ジェイは、ナセアは知らなかったことだが、実は乗馬と槍が特に巧みで男たちの間では知られた存在だったそうだ。戦場ではそれを買われ総督の王弟ヴェアミン大公の親衛隊を任される身となっていた。彼自身も、彼以外の他の者たちもそれは名誉のことだと最初の頃の手紙に書いてもいた。

しかしひと月ほど経ってからナセアの元に来たジェイの手紙によると、ヴェアミン大公とは自尊心やうぬぼれが強く、どこか自軍を過大評価する面があると分析していた。

戦場の駆け引きにおいても、武人の礼儀だの美学だのといった精神論を持ち出し、奇襲や斥候による情報収集を卑怯だといい、さらには新兵器なども邪道だと言って採用など認めない。そのため、その総督の作戦には無理があり、一見勇ましいようでも、ただ正面をだらだら攻撃しているだけで犠牲が多く成功するところが少ない。そんなことも言っていた。

それで居ながら、ロティオール为国表には華麗な装飾を施した文章で樂觀的な報告のみを送り、自らの力量を自ら喧伝することがはなはだしいために、国内では彼は名將軍だと思われる。とんだ勘違いだ、とジェイにしては珍しく、批判がましい愚痴めいたことを書き送ってきた。

それを読んだときには、ナセアは戦場のジェイに同情した。

ナセアもまた、ヴェアミンの自己満足な宣伝に基づく宮中の噂で、一見戦線が膠着しているように見えるがかの大公が名將であるから、かろうじてサンサを食い止め得ているのだ、と皆と同じように思っていたのである。

そして、ある日。

ヴェアミン大公の発案による総督自らの前線の督戦に同行したジェイは、その派手やかな行列を標的に奇襲してきた敵の遊撃部隊に

よって殺された。

わが部下にふさわしく勇戦し壮烈な戦死であったと、ヴェアミン大公からの賛美と悔やみの手紙も届いている。

だがありようは。

ジェイと親しく、そのとき共に親衛隊の副官としてヴェアミンにしたがっていた彼の友人によると、3日くらい前に全軍に予告した上で督戦で、それが当たり前だが敵に漏れ、そのうえ如何にも派手好みの総督らしい行列を繰り出したがために、すぐに敵の標的となった、という。

その上、敵に襲われた途端にヴェアミンは逃げ出し、そのだらしない遁走に引きずられて陣が崩れかかった。それを立て直すために、殿にしんがり戻って戦ったジェイが、戦死したのだそうだ。

言いたくはないが、とジェイの友人は、齒軋りの音を立てながらつぶやいた。

敵に殺されたと言うよりは、無為無策でかつ無謀な総督に殺されたのだと言っていい、と。

その友人は、腕と足を折る重傷のために帰国を許され、包帯だらけの体で、ジェイの遺髪と、死んだ日に着ていた衣服を宮殿内のナセアの元に持ってきてくれたのだった。

ジェイは即死ではなく、重傷の状態で自軍に戻り、死んだのだそううだ。

「ナセアに、謝らなければ、と…」

それが最期の言葉だったらしい。

それを聞いたとき、ナセアは気を失って倒れた。

それから二、三か月の間は、ナセアの中では記憶がない。

葬儀を行い、戦場から送り返された彼の遺品の整理などをしながら、ただ泣き暮らしていただけである。

好きで結婚した相手ではなかった。

ただ家同士の間で決められたことに従って、結婚すると決まってから初めて会い、この程度の人か、と落胆するような思いでナセアはジェイに嫁いできたのだ。

夫婦となってから、顔を見てもときめきがあるわけでもなく、皮肉を言っても通じず、機知に富んでいるわけでもなく、怒ることもない。ただの歯ごたえのない男だと思えなかった。

わざと困らせることばかりをいい、わざと拗ねて見せたり無理なわがまを言い出しても、気まぐれに振り回しても、彼は怒ることもなく、ただ彼女の言うなりだった。

そんなジェイを見ていて、じれったくもうつとうしくもあつたナセアだった。

それでもそんなふうに、懸命にナセアを受け止めようと努力するジェイの妻であることが、いつの間にか当たり前になっていった。取り立てて特徴もない平板なジェイの顔を見ることがナセアにとって気持ちの安定になり、居心地のいい夫婦の環境ができていた。ジェイがサンサに行ってしまうことになって初めて、その居心地のいい環境を失うと知って初めて、ナセアはジェイをかけがえのない人なのだと強く認識するようになっていた。

胸が高鳴るわけでもない、頬が熱くなるのでもない。そういう穏やかな愛情をジェイがいつの間にかナセアの中に根付かせていたことを知った。胸を高鳴らせ、頬を熱くして口づけしたり抱きあったりすることだけが愛ではなかった。

ジェイとすごした年月がなければ、ナセアは一生それに気づかなかっただろう。

だから、ジェイが帰ってきたら、自分から、愛していると彼に言おうとナセアは心に決めていたのだった。

そんなナセアだったが。

二五歳になっっている今、貞淑な人々からは白眼視される生活に浸

っている。

領地にはほとんど寄り付くこともなく、彼女はただキーウの屋敷と、宮殿内に与えられた部屋にばかり居た。夫のジェイがなくなつてからは、ますますグローセン領には足が遠のき、首都の中の屋敷にさえ赴かずに、どちらかという宮殿内に住いしているようなものであつた。

常に恋人が三人は居た。だが長く付き合つた男は少ない。続いても一月程度。男を渡り歩くふしだらな女と貴族たちの間では好奇の目で見られるようになってしまっている。

身分は故グローセン男爵の未亡人。父親はツィング子爵、母親は現王の庶腹の姉、従つて王の姪という血筋でもある。

年齢にふさわしく豊艶な容貌に華やかな化粧を凝らし、誇りやかに実つた胸元を強調する衣装を身につけ、人を振り向かせずに居られない媚態を示す。間近に語らえば、その蟲惑に抗える男は少ない。蜜が滴るような色香をたたえた、妖艶な女性そのものであつた。

昨夜は。

某国の大使の館から深夜に宮殿内の自室に帰宅した。帰宅することとは明け方であったり、あるいはその次の夕刻であることさえある。ナセアとしては各国の大使は付き合いやすい相手である。妻を伴っていない者ならなおさらである。任期が終わればいなくなるのであつくされない。それにロティオール国内では珍しい品物を贈ってくれる。彼女より身分の低い男たちであるが、結婚するわけではないから、立場など関係はない。

どうでもいいのよ、とナセアは思う。

どうにもつまらない時間をつぶしてくれるだけの相手で、少なくとも一緒に居る間に居心地が悪くなければそれで良い。相手が求めるなら身体など明け渡しても構わない。少なくとも彼女が付き合っている男たちにはそれ以上に感情の中に踏み込んでくるような者もいなかったし、責任を負おうという者も居なかった。

彼女も男に心の中のことまで踏み込んでほしいとは望まなかったし、責任を持たせるつもりなども全くなかった。その場その場で顔だけでも笑って過ごせればよく、要するに未来への期待は何も無いのだ。

思い入れたり、期待したりして裏切られるのは御免だ。そういう重たいものから開放されている状態に、ナセアにはなんの不満もなかった。

貞淑であることを誇りにする女たちがどんなにナセアに苦情を言い立てても、忠言めいたことを告げて、行動をあらためるつもりなどない。却って、気ままに過ごせない貴婦人たちに、うらやましいのだから、気の毒に、と言ってやりたい気持ちさえある。

あなたのためを思つて、と痛烈に苦言を呈し、それをさえ聞き流すナセアに背を向けた親しい人々も居た。

だが、誰が、私の何を知っていると言うのだらう。ナセアは髪を梳きながらつぶやいた。

この年の王の戴冠記念日の式典は、サンサとの戦中ということもあつて、小規模に行われた。

その堅苦しい形式に則った儀式のあとの宴席は、まだ堅さの残る始めの頃はナセアにとっては居心地の悪いものだ。付き合っている男たちも、そのときはまだ身分柄の座席について、妻の居る者は傍らに正妻を従えている。寡婦のナセアは一人である。

宴席が雑駁になった頃は、ナセアは良く出入りしている詩の朗読会のサロンの仲間などと壁際の一角に集まって歓談をしていた。詩の朗読会といつてもそれは名目上で、ただ集まって食事をして茶を飲んで酒を飲んで語らうだけの仲間なのである。ナセアが付き合つたことのある男たちも何人かは居る。彼女は他にもいくつかの会合に行っているが、そういう人々の中から関係を持つ男性を見つけるのである。

ナセアは顔も見たくない人間がこの場に居ることにいらだっている。

なぜか、サンサの戦線から離れ、総督であるはずのヴェアミン大公が居る。

身分も高く、また回りにかしく人間を従えるのが好きなヴェアミンだけに、大勢の取り巻きに囲まれていた。

その中には彼自慢の長男のラスデロスと、特に自慢にしている娘のワナンが居る。

ラスデロスは父のヴェアミンが喧伝するほどには立派な少年ではないことは既に周知のことだが、一四歳になるワナンは宣伝どおりの美少女であつた。

彼女の美貌は、生まれながらの質もあるのだろうが、おそらくは有り余る財を投じての手入れの賜物であろう。卵形の輪郭の頬が柔らかに微笑みを作っている。悪戯な光を湛えた青い目も大きく、瞳を彩る睫毛も豊かで、鼻筋も細く通っており、唇の形も美しい。少女にしては紅が濃いかもしれないが、腕の良い化粧師を雇っているようで、描かれた眉の弧も実に愛らしい表情を見せていた。

衣装にもいやみなほど贅を尽くしている。つややかな金髪に、あふれんばかりの宝石をつけたティアラを載せ、細い滑らかな首周りにも重たいほどに宝石をまとわせ、光り輝かせている。ドレスもまた、高価な薄絹を何枚にも重ねたスカートは微妙な桃色を軽やかに奏で、彼女が身動きをするたびに柔らかく魅惑的にゆれていた。

ヴェアミンの「取り巻き」になる何々伯爵だのなんとか子爵だのが居り、それと共に、その奥方や令嬢はワナンの取り巻きとしてかすんでいた。

ワナンの取り巻きの中に、異色の存在がある。

所在しないような戸惑った表情で、ワナンに左腕を掴まれて立っているだけの少年。光沢のある水色の上着に、細身の濃紺の下裾着スボン。上着の衿元と裾まわりの刺繍に細工を凝らしてある、贅沢な衣装であつた。

その贅沢な出で立ちにも引けを取らないほど、少年の容貌が際立って美しい。その少年が誰であるか、は、ナセアだけでなくこの場の誰もがわかつている。先ほどまでの式典では、彼は身分柄の位置に座があり、その席についていたからだ。

第二王子のソント公こと、ラシアヴィラム・ダレイス・カザである。まだまだ少年ではあるが、成人にも扱われる一五歳になり、ようやくソント公として公の場に姿を現したということだろうか。

ロティオールはこの場に居ない貴族も、この場に出席できた貴族も、こういった場に出てきた「ラシャ王子」をこれまでには見たことが無かつただろう。

ラシャ自身、宴にあまり出てきたことが無いだけに、顔見知りも少ないらしく、ただ、いとこのワナンに腕を掴まれながら落ち着かない顔で周りを見回していた。

誰もが、彼を見つめている。ナセアも興味を持って美貌の王子を見ている。

ラシャは、彼の母親のような卵型の輪郭の中に、やや鋭いが涼しげな眼差しの青い瞳を蔵している。凜々しい眉、高く通った鼻筋、緩みの無い唇、何をとっても彼の周りの娘たちよりも華麗な容貌であった。

それでいて男性的なのは、肌がよく陽に焼けて浅黒いためだろうか。つややかな黒髪がその美貌をさらに神秘的にさせていた。

まだ一五歳という年齢もあり肩の線が細いが、高くしなやかに天に伸びた肢体は、均整の取れた彫像のようだった。

誰もが眼を奪われる美貌である上に長身のためラシャはさらに目立つ。

つまらなそうに周りを見渡し、時折、ワナンに話しかけられて一言二言をかわす。それからワナンと言葉を交わしていたらしい他の人に一瞥を与えて、またよそを向く。そんな仕草を繰り返していた。周りを見渡していたラシャと、それを遠望していたナセアと視線が合った。礼儀としてナセアはすこし頭を下げて会釈をする。ラシャが合点の行った表情で同じように少しだけうなずいた。二年ほど前に一度だけ会ったことを思い出したのだろうか。

直後に、ワナンがナセアを見て、険しい表情でにらみつけた。

「あんな方に挨拶すること無いわ。あの方はね、ふしだら、なんですって。お父様もお母様も皆様もそう言っているわ」

ナセアの耳に届くほどに鋭い声であった。同時にワナンはラシャの手をさらに引いて、ナセアのほうに背を向けさせた。

ひどく辱められた形になって、ナセアの扇を持つ手に力がこもった。

ちやほやされているだけの少女に、嘲笑された。

それだけではない。

誰のせいで未亡人になったか、あの少女は知っているのだろうか。無能な指揮官であるヴェアミン大公、つまりワナンの父親のせいで、ナセアの夫であるジェイは死んだのではないか。そのためにナセアは今のような寡婦になった。知っているのだろうか。

他の誰に見下されても笑って聞き流せるナセアだったが、ワナンには、と言うよりヴェアミンに近い者には言われなくなかった。

何がわかっているというのだろう、世間知らずの甘ったれの小娘め…。ナセアは大声で叫びそうになるのを懸命にこらえた。

大きな権力をもつヴェアミンに逆らうことができない身分の悲しさ、辛かった。

「失礼…」

ただそれだけを告げてその場を立ち、バルコニーに出るだけで精一杯である。

憤りに鼓動が激しくなっている。

バルコニーに出ても、どういふわけか室内のワナンの高く澄んだ話し声ばかりが聞こえている。陰りの無い、無邪気な声。

何一つ疑うことなく、ヴェアミンという大きな庇護の下で、わがままに真っ直ぐに、自分を矯めることなく育ってきたのだらう。よいものは良い、悪いものは悪いとはつきり言える、素直な性情なのだらう。

だからふしだらと称される女は悪いもので、彼女は堂々とそれを懲らしめただけ、誇らしく自分の純粹さを主張しただけなのだ。ふしだらな者が傷つくのは、自業自得だ。誰も彼女の正当性を疑いはいないのだ。

しかしそれはただ恵まれた者の論理ではないか……。ナセアは釈然としない。憤りよりもむしろ哀しみが胸の中に広がっていった。

じっと立ち止まっていたは泣けてくるので、ナセアは広いバルコニーを柵にそってゆったりと歩きだした。夜風が頬に冷たい。

宴の間に飲んでいた酒も少し醒めた。

広間にはまだワナンが居るだらう。ワナンが居なくてもヴェアミンは居るだらう。もう彼らと同じところに行く気はしない。

俯きながらバルコニーを端まで歩き、廊下に出ようかとしたところ。

すれ違いざまに、人にぶつかった。

「これは失礼……」

ひどく高いところから声がしたように思った。見上げると、それはラシャだった。

「こちらこそ。申し訳ございません。どちらかへお急ぎですか?」

「否や」

「それではお帰りですか？」

「勝手に帰って良いのかどうかわからないんだ」

滅多に宮中の行事に出たことが無いラシヤらしい戸惑いだった。

「陛下にお暇はなさいましたか？」

「だいぶ、前に」

「どなたも教えてくださらなかったの？陛下にお暇がお済みでしたら、お帰りになるのは構わないと思いますわ。」

それを聞いて、ラシヤは露骨に安堵のため息をつく。

「そんなに、お疲れですの？」

「つまらなかった」

ナセアはおもわず笑ってしまった。唇に指を当てて笑いながら、自室までの道を共に行こうと誘った。

ラシヤと肩を並べて歩いている姿を、ワナンが見たらどれほど嫉妬するだろうと想像するだけで、先ほどの悔しさが晴れた。

道すがら、改めてナセアは名乗った。「ソントに来たのは、昨年だったか？」とラシヤは一応彼女を覚えてはいたようだ。

それよりも彼女は、彼が今回の宴に顔を出した理由を知りたく、それを質問した。成人とみなされる年齢になったからか、と聞くと、そうではないと言う。

二カ月ほど前にレスフォに滞在したワナンが、ついでに訪れたソントでラシヤに会い、その後は手紙で彼を執拗に誘い続け、衣装を送り、迎えをよこし、はなはだしくは彼を騙って王に対して出席の返事まで出しておいた、というのでやむを得ずに出てきたのだと言う。

一四歳のワナンはよほどの一つ年上の従兄のラシヤに執心のようだ。

そう気づいたナセアは、ふと、このラシヤをワナンから奪ってやるうという考えにたどり着いた。

ナセアはラシヤを自室にいざない、閉めた扉の前で、彼の耳元に

かすれた声でささやきかけた。

女を知らないなら、教えてさしあげましょうか…？

硬直したラシャの胸に頬を寄せ、しなやかな背中にナセアは腕を回して抱きしめた。豊かな胸の隆起がラシャの身体に強く押し付けられている。

思春期の少年は、狼狽したまま、ナセアの蟲惑の中に簡単に堕ちた。

夜明け近くに、ナセアは眼を覚まし、傍らのラシャを起こさぬようにシーツを脱け出してローブを羽織った。

髪を指で梳かす。幾度と無くラシャが指を絡めたために、乱れていた。

小さなため息を吐きながら寝台を振り振り向くと、寝返りを打ったラシャが、薄く眼を開けて彼女を見ているようだった。

「朝なのか…？」

「もう少しでね」

ラシャが手を伸ばし、ナセアの指に触れる。

「俺は、どうしたら…？」

「まだ少し居て良いわ」

ゆっくりと起き上がったラシャが、ナセアの手を胸元に握りこみながら、

「そうではなく」

と言った。

ひたむきな眼でラシャはナセアを見つめている。彼の端麗な面差しの思いつめた表情を見ると、魅入られるような胸の痛みを感じた。「王子様は何をおっしゃりたいのです？」

おどけたように敬語を使うと、ラシャがひどく拗ねた顔をする。

「ずっと、ナセアと離れたくない」

少し口ごもりながら、切れ切れに彼は言う。薄暗いが、頬を紅くしているのはわかった。

普段のナセアは、遊びなれた年上の男性との予定調和の付き合いしかしていない。

まして十歳も年下の少年の、初めての女性、となったことも無い。情事の後で、離れたくないなどという言葉は100回も聴いたが、ラシャほど熱い眼差しで言ってくれた男は今まで居なかっただろう。眼差しで彫像さえ蕩かしてしまいそうな美少年に熱く見つめられて、ナセアも悪い心地ではなかった。

「結婚、すべきだろうか。こうなった以上は、父上に許しを得て……」数十秒の逡巡の後に、さらに切れ切れにラシャは言った。

ナセアは一瞬だが目の前が真っ白になった。ラシャの発した言葉が音としてしか理解できなかったのである。

何度か頭で反芻するうちにようやく、ナセアの中で彼の言葉が意味を成したとき、驚愕はなお大きくなった。

ただ一夜を共にしただけで、結婚と言う言葉が出てくるとは。

ナセアのみならず昨今のロティオール社会にはありえない。彼女の中にはそういうある意味で常識的な意識があった。だから混乱し、返答に詰まった。

ただ沈黙したナセアの前に、ラシャが寝台から降りて跪く。美貌の王子はナセアを崇拜するように、陶然と見上げながら、最前から握ったままの彼女の手の甲に接吻した。

「こういうとき、どうしたらいいのかわからないんだ」

眉をひそめて、ラシャは悲しいような甘えるような眼差しをした。声さえも震えている。

「……無理よ」

ナセアはうつろたえて口走った。唇からその音が漏れた後に、少し間をおいて、

「私は、もう故人とはいえグローセン男爵の夫人で、まだその縁は終わっておりません。それにそもそも当代の第二王子のあなたとは釣合いがとれる身分でもありません。……まして、私はあなたより一

〇年も歳をとっていますわ」

低い声でラシヤに道理を諭すように言い、言葉の途中で何度か首を横に振った。

「年齢的にも、ご身分柄でも釣合いが取れるお相手としてラシヤ様にお似合いなのは、お若くお美しいワナン様のような姫様でしょう。」

「ワナンなど、関係ない」

身分も、年齢も関係が無い、とラシヤは、ナセアの語尾にかぶせるように強く否定する。

それを聞いて、目を伏せて目蓋を震わせながら、ナセアは悦を覚えてる。

暗闇の中で躊躇いがちにナセアの肌に触れたラシヤの手を誘ったのは、そもそも宴の席で彼女を「ふしだら」と嘲笑したワナンの想い人である彼を身体で奪い取ってやろうという目的を持つての行動だった。

純潔の淑女を誇る小娘のワナンであっても、誰よりも先に恋したラシヤの接吻を受け彼の腕に抱擁されることを夢見ているのだ。いずれ時季が到来した折には、と彼から求められるように遠まわしに策を弄することが、ワナンなどの淑女気取りの女たちのたしなみなのだ。

所詮、遅かれ早かれ為すことを為すのである。それを心の底から望んでいるくせに、直接に具体的な行動を起こすものを「ふしだら」とあざ笑う。

それがどうだ。

高慢ちきな小娘が心底では欲している行為そのもので、彼女の想い人をナセアは奪ってやった。彼はナセアに対して跪いて求婚までしている。

ワナンなど関係がないと否定したラシヤの言葉を、そのままあの淑女気取りの小娘に聞かせてやりたいものである。心中で快哉を叫

んでいた。

しかしながら、ナセアにとっても予想外だったことがある。ラシヤがひたむきに彼女を見つめていることだ。

胸が痛くなるほど真っ直ぐな、熱を帯びた強い瞳。

昨夜。

何の予兆もなくナセアに触れられ、狼狽した彼に向かつて、ナセアは、男と女が愛し合う行為の實際を、身をもって説いた。そこに生じる心身の変徴も当然のことだと耳元に囁きかけて、彼の羞恥や理性などと言ったものを、本能の下に沈めてやった。

とても簡単なことだった。

それよりも、ラシヤからのこの求婚への返答のほうがずっとずっとナセアにとつては難問である。だからといって、ワナンの高慢な鼻を折ってやろうとしてラシヤを誘ったとは、もう言えない。

ラシヤは、ナセアと離れたくない離れられないと呟くように訴えている。やがて立ち上がって彼女を力を込めて抱きしめた。

「考える時間を下さいませ」

ナセアは懇願した。胸がひどく痛んでいる。

世間知らずのぼうやは話がわからなくて鬱陶しい、という冷めた思いと、ワナンへの腹いせに誘惑しただけなのに、それと気づかず、ナセアとこれからも愛し合うのだと無邪気に信じるラシヤへの罪悪感が、彼女を二分していた。

とにかく、ラシヤには陽が昇りきる前に自室に戻るよう促し、この一夜のことは、時が来るまでは誰にも、たとえ彼の従者や親友や父親と言えども絶対に内密にすることを約束をさせた。

それから数日。

ナセアはその間にも二・三の宴に出席した。まだ誰にも彼女とラシャに関係が出来たことは知られては居ないようだった。

その宴の一つにワナンも出席していたが、ラシャは居なかった。そして相変わらずワナンなどその一群れの連中はナセアを見下す態度をしているようだ。

その様子を見る限り、ワナンもあの一夜のことを知らないと思える。

あの時にナセアがもくろんでいたのは、ワナンがラシャを奪われたことを知り、泣いて悔しがる姿を見てやりたいということだったが、それは未だに叶っていないことになる。

しかし今のナセアは、あの秘め事が知られていないことに心底から安堵しているのだった。

日を追うごとにナセアの中ではラシャに対する罪悪感が増していき、また他の懊悩も加わって眠りさえ妨げられるほどの悩みになっている。

これまで自分の行状がラシャに知れることが何より怖い。そしてあの夜の彼とのこともいつもの遊びと思われ、彼に軽蔑されるのでは、と疑った。それが恐ろしくてたまらなくなってしまうていた。

その恐怖が何故かなど、ナセア自身は心の中ではぼかしている。自分自身を見つめなおしたことがない小娘ではない。

ラシャという10歳も若い少年に、ナセアは恋情を感じていると自覚していた。自覚し、怯え、苦しんでいるのだった。

恋情に眼を潤ませた憂い顔のナセアは、常よりもさらに艶色を増して悩ましい。

常によく付き合っている恋人の何人かが彼女を誘ったが、気乗りがしないと言つてずっと断つていた。

そのくせ宴の間に立ち上がれなくなるほどに酒を飲み、結局は恋人の誰かが彼女を連れて帰り、男は彼女を当然のように抱いた。

ナセアは嫌だと断り、伸ばされた手を拒んだが、それすらも男たちは興趣として悦び、彼女の嗚咽を悦樂のものと決め付けるのだつた。

宴やサロンに出て誰か男性を伴つて一夜を過ごす。

はたから観れば、それはこれまでのとおりの彼女の日常である。何の変哲も無い常の行動そのものであつた。

ナセアはそんな暮らしを繰り返す自分を嫌悪し始めている。

清冽なラシヤの瞳に出会い、自身の行動を初めて省みて、愕然とした。

霧の深い森の中で彷徨しているときに、不意に明るい陽光に照らされて、自分自身の裾が汚濁にまみれていることに初めて気づいた迷子のようだった。あまりの汚れを恥じて、光の当たる場所からまた森に潜り込んでしまったような、そんな気持ちになった。

あの時はラシヤも惑乱していたのだろうが、冷静になったときにナセアのその裾の汚れに眼が行き、彼はきつと眉をひそめて彼女に触れたことに後悔するに違いない。彼女をさげすむに違いない。

「馬鹿！」ナセアは不意につぶやいた。汚いことと承知の上で、誰かの夫だろうと婚約者だろうと、むしろそという者を選んで、誰とも構わずに情事を繰り返してきた。

生臭い泥沼の中に旋毛の上まで浸かっている。

そんな自分が、あの穢れない眼差し of ラシヤに寄り添えるなど有り得るはずが無い。彼の言葉にほんのわずかでも頬を染めるなどおこがましいことこの上ない。

それに彼と関係をもったことも、まずは遊び、ワナンに対する腹いせだったのだから。

ナセアのこれまでの行動や、あの一夜は、亡き夫の仇の娘のワナへの当て付けだったとラシャが知ったとしたら、彼はどれほどナセアを軽蔑するだろう。どれほどひどく傷つくだろう。

その想像が震えるほどに怖かった。

その蔑みと傷心の視線に、彼女自身が耐えられる気がしない。

「ねえ、助けて……」

胸の下に、ナセアは懇願した。

男は40半ばの中流貴族である。ロティオール島の東側の半島を挟んで存在する大国ザイラオンとの間の、島国ティーランという国の公使という役でこの国にいる。

ティーランは面積こそ小さいが、立地が良く近辺の国々の交易の仲介ができる利点があるために、国全体が大きな商業都市のような殷賑の国である。様々な国の商人や貴族もティーランに拠点を置くこともあり、雑多で自由な国である、と公使の彼はナセアに説明したことがあった。

「助けて、とはどういうことですか？」

男はナセアの髪を撫でながら丁寧に訊く。

彼にとってのこの若く美しい恋人は、ロティオール王の姪という眩しい様な血統の持ち主なのだ。おのずと交わす言葉は彼が敬語になる。

「……そうね、また今度話すことにするわ」

四日後、ナセアは珍しくグローセン男爵家の領地に赴いた。キーウを昼に出発して夜に領地に着き、二泊してまたキーウの宮殿に戻った。

宮殿の自室にナセアが戻ったのは、月が中天に昇っている頃である。

思い起こせば、月があるうちに自室に居ることは少なかった。ラシャとのあの一夜のあとは、意識的に自室に戻らないようにしてい

た向きもある。

侍女たちに手伝わせて就寝の準備をしたのち、彼女たちを下がらせて寝室に入った。寝台の脇の明かりを消し、床に就こうとした。窓にコツンと何か当たった音がした。

絹のローブをざわざわさせながら、早足で窓辺に行く。バルコニーの下にいる、長身の影がゆらりと動いたのが、闇の中に見えた。呼吸も忘れてナセアは急ぎ窓を開け、欄干から身を乗り出した。そして下へ向けて手を伸ばす。

その人影はナセアの手を取ることも無く、壁の装飾を伝って軽々と階下からバルコニーの欄干を越えて、彼女の傍らに立った。フィードを取るまでも無い。ラシヤだった。

ナセアはまるで坂を駆け上ったように呼吸を乱している。鼓動がのどから出てしまいそうな、胸の高鳴りを感じた。

「早く、中へ」

強い力でラシヤの手を引き、ナセアはそれでも用心深く足音を忍ばせて寝台まで走った。

「どうして、ずっと、半月も居なかったんだ？」

責めるよりも悲しげにラシヤはナセアに訊く。

もつれて倒れながら、ナセアは、今はそんな話をするより一瞬でも長く、と言い、彼のうなじを引き寄せて唇を求めた。

ナセアが恐れたとおり、ラシヤはどうやらあの夜から毎夜、今夜のようにバルコニーの下から彼女の寝室を見ていたらしい。侍女たちが時間になれば明かりを灯すのは、主が不在であつても行われる慣習であるが、主がその寝室を使わなければ夜が明けて侍女が寝室に来るまで消されない。

彼はずっと、消えない明かりを見上げて、地面の上で夜を過ごしていたのだという。

昼間は兵学校に行かねばならないため、空が藍色を帯びてくる頃にはさすがに自室に戻っていたそうだった。

ナセアが戦慄するほどの情熱だ。

それでこの半月の間にナセアは何をしていて何故自室に居なかったのか、という話柄になると、巧みな仕草で彼を乱して言葉を遮った。

そんな話は後にして、お願い、とナセアは言う。

「ナセア」とラシヤが彼女を呼ぶ。その声は、呼ばれた本人にも切なく響いた。

多くの言葉を語らないうちに、別れなければならぬ刻限になり、縋り付くような表情のままでラシヤはナセアの元を去っていった。

彼が去った後の窓辺で、

「愛している、か……」

ため息と共にナセアはつぶやいていた。

たった今去った少年にとっては、瑞々しい響きを持った聖なる言葉で、ナセアにとっては単なる誘い文句だった。その溝はどうやつても埋まらないのだ、と彼女は諦観している。

今のナセアは自分自身をさえ軽蔑の対象にしていた。

ラシヤの純粋な瞳を見つめて、彼を誘惑したことを後悔している。罪悪感に苛まれながらも、謝罪をすることもできずにいる。もし謝罪したのなら、ラシヤはひどく傷つくだろう。そしてナセアを軽蔑し、嫌悪するに違いない。彼女を見る彼の眼差しの色合いが変わるのを、間近に見たくなかった。

その日からナセアは夜宴や会合の誘いをすべて断った。

自室で休むようになり、深更に密やかに訪れるラシヤを夜毎迎え入れた。

昼間は、以前のように夜の宴に向けての化粧などの準備に費やすことも無く、珍しくテーブルに座って書き物をしているのだった。そしてその書いたものを侍女に託し、方々へ便りを出している。

そのうちの一つが、叔父であるヴァルト・オーディアス王への面会の申込であった。

ナセアが王に個人的に会うのは、ジェイと結婚して間もない時期以来である。その日、約束は夕方であった。

王に会う約束を取り付けたナセアは、その時刻に間に合うように身支度を整える。彼女の魅力である豊麗な曲線を強調することなく、胸元も開けず、色合いも紺色を主体にした地味な服を選んだ。衿と袖の周辺とサツシュ、それにドレスの裾に光沢のある白いリボンをあしらっている。髪もカールを垂らすこともなく上のほうに小さく結び上げた。

アクセサリーは大粒の真珠の首飾りと、髪飾りだけ。ナセアの褐色の髪には白い真珠が良く映える。

そんな姿を鏡に映して、ナセアはふとため息を吐いた。

髪飾りは、かつてジェイにねだって手に入れた南方産のものだ。

真珠は、ジェイに似ているとナセアは思う。

磨かれた石のようにまばゆく光を跳ね返すものではない。強い光を吸収しているかのように眼に優しい光を放つのである。

柔らかな曲線の輪郭にやや目じりの下がった大きな眼、睫毛が長

く濃く、夕闇のような蒼い瞳に影を落とす。水を含んだようにふつくらした唇は拗ねたように少し尖っていてなまめかしい形をしていた。化粧はいつもに比べればずっと薄い。彩りも飾りもほとんど排除した状態でも、ナセアは十二分に美しいのだった。

この姪と面と向かうのは何年ぶりかと王は思った。

前王の正妃から生まれた王は、身分の低い女性から生まれたナセアの母親である異母姉とは疎遠だ。ナセアもまた王に近いというほどの身分ではない子爵家の娘に生まれ、さして地位も高くない男爵家に嫁いだ。姪、というよりは一般的な貴族の情報として、王はそれを知っていた。

また、結婚前のナセアと、寡婦になったナセアの艶聞が派手であったために、姪というより話題の女性としての彼女を知っているだけのことだ。

なるほど、と思う。紺と白という清潔感あふれる色彩をまとっているのに、彼女から発散される気配は、清々しさよりもねっとりまとわりつくような色香である。その微笑みも喉に粘質のものが絡みついたような媚があふれ、どこか扇情的で、王を落ち着かない気分にした。

「珍しいことだな。どういった用件であろう？」

王はやや素っ気無く言う。

「いくつかのお願い事がございます」

冷たい口調の王にすこし逡巡しながらナセアは答えた。

自覚も無く普段のように男を惑わせるような微笑を浮かべ、その技が通じなかったことでうろたえている。

よく考えれば、叔父である王に対して媚態を示したところでなんの益もない上に、事務的な話をする場でのそういう態度が逆に不快感を与えることもわかる。それでも媚を浮かべてしまうことは既に身から落とせない垢のように習性になっているのだろう。

「私の姉にティールランに嫁いでいる者が居ります。その姉から彼の

地での再婚の話をもらいました。陛下にもお許しいただきたく存じます」

ナセアは、傍らに控えている侍従に、持参した手紙を王に見せるように預けた。

その手紙を一瞥し、相手の素性などを見てから、なるほど、と王は言った。

「そなたも寂しい思いをしていたのだろう。許す」

「ありがとうございます。次のお願いですが、現在は私はグローセン男爵夫人のままですが、その身分を返上し、ただのツィング子爵家の娘に戻ってから、ティーランに参りたいと思うのです。そして嫁ぐまでの間、できれば後宮に身を移したいのですが」

一旦言葉をきってから、すこし視線を外して、今までの不行状がありますから、と言った。

後宮ならば男性は入り込めない。彼女なりの楔ぎのつもりなのだろう、と王は判断し、それにも許可を与えた。

「さらにもお願いがあります。グローセン男爵家の跡なのですが」

ジェイが亡くなってからはナセアが主不在のまま、男爵夫人という立場で領地を持っている形になっていた。それは遥かに低い身分であるとしてもナセアが現王の姪という血を持っている故の暫定的な措置で、ジェイの弟で他家の跡を継いでいた者に子供が二人以上できたら、その一人にグローセンを継がせる予定であった。

ナセアは、王の前であるにもかかわらず、項垂れて大きなため息を一つ吐いて、また大きく息を吸った。

その仕草に瞠目する王に再び向き直ったナセアは、

「先の主、ジェイにはセロという名の庶子が居ります。近く五歳になります。その子に跡を取らせたく、お願いします」

悲しいような切ないような、それでいて決然とした表情で言い切った。

「侍女と共に控えております。お目通り願えますでしょうか？」

「許す」

背後の侍従を振り返ると、心得た顔で、ナセアの控え室に向かって去っていった。

王が見るところ、ナセアは肩の力を落としているようだった。

「庶子は、いくつになると？名は？」

「今はまだ四歳です。まもなく五歳になります」

「後見は？」

ナセアが答えた名前は、王が覚えても居ない下級貴族の名前であった。

ジェイの最期の言葉と彼の遺髪を届けてくれた友人である。

つい先日、ジェイの弔い以来初めて彼に連絡を取ったのだ。

彼は戦傷のために足が不自由になっており、杖が手放せない身の上になってしまっていた。それでもジェイの親友であった彼は、ナセアからの庶子の後見になってくれと言う申し出には快く応じてくれた。

彼の名はサイオン・ホーラーという。爵位は無く、騎士という最下位の貴族である。年齢はジェイより2歳年長で、現在は32歳に成る。妻も居る。だが子供は居ない。

ナセアは

「貴族の方を執事に出来るような家格ではありませんが」

と断った上で、ジェイの子供の後見を頼んだ。執事としてグローセン男爵家に夫婦で住み、庶子を養育して欲しいという願いであった。穏やかにサイオンはうなずいて、喜んで引き受ける、と言ってくれた。

「…案じておりました」

「ご心配を申し訳ありません」

ナセアは、自分自身の不行状は、サイオンのようなというより、彼と似た性情のジェイのような人物には許しがたかっただろうとわかっている。

だが、誰が、彼女の心の何を知っていると言っのだらう。

「私は、知らなかったのです。あの日まで、あの子の事なんて」

ナセアがジェイの庶子の存在を知ったのは、ジェイが亡くなつてから1ヶ月ほどたったときであつた。

首都キーウでジェイの弔いを終え、彼の残した様々の物を整理するため、彼の生前にも滅多に近寄つたことの無いグローセン男爵領に赴いた。

そこでナセアを迎えたのは、以前にキーウの屋敷で勤めていて、ナセアの宝飾品に手を付けたために辞めさせた侍女であつた。

その侍女が、庶子セロの母親である。

彼女の胸に抱かれたセロは、認めたくなくてもジェイに面差しがとてもよく似た男の子だつた。

ナセアはまったく知らなかつた。ジェイが、まさかあのジェイが、ナセアの知らない所でナセアに秘密のままに子供まで生ませていたとは。

胸に手を当てながら

「誓つて申しますけれど、今の私の口から言つても信じてもらえないかもしれませんが、ジェイと結婚してからは本当にジェイだけを愛していました。本当です…。たくさんわがまを申しましたけれど、私はジェイを裏切つたことなどありませんでした」

乾いた声で、あの子のことを、とナセアは言つた。

「サイオン様はご存知でしたの？」

「…まあ、そうですね」

「あなたも、ジェイと同じね。裏切り者ね。酷い人」

寂しげな微笑から、サイオンは眼を逸らした。

子供が来るまでの間、王はナセアの話の聞くと無く耳に入れて

いる。

「私は、あの子のことなんてまったく知りませんでした。誰も教えてくれなかったし、ジェイも黙っていました。侍女の話によれば、子供が出来たこともただほんの一度の過ちだったと申しておりまして。生活の面倒は見ていたようですが、屋敷に入ることも、ジェイに拒まれていたそうです」

いま考えると、ジェイのしたことは冷たいことだ。

侍女はキーウの屋敷を放逐された後、行き場を失って、グローセン領に向かうジェイの馬の前に飛び出し、懇願して下働きの使用人として領地の館に住むことを許された。そのジェイの許可を非常に恩に感じていたという。

その恩が、ジェイへの思慕になり、彼が湯浴みをしているときに忍び込んで関係を持った。しかし本当にその一度きりだった、と侍女は言った。

妻のナセアを裏切ってしまったことをジェイがひどく悔やみ、苦しみ、侍女にむかつては二度と顔を見たくない、とまで告げたという。それでもさすがに子供が産まれたときには、侍女のもとを訪れ、生活だけは保障すると言い残し、その後は母子はほとんど捨てておかれた。

サイオンは、ジェイが戦場で亡くなるときにそのことを初めて聞いたと言う。

「捨ててしまった子が居る、と……。それからそのいきさつを聞いて……。もし他の誰かからセロのことを聞いたら、あなたが悲しむかもしれないから言わないでくれと……。ただあなたを一度でも裏切ってしまったことを悔やんでも悔やみきれないと」

「何と言っても、もういまさら仕方の無いことね」

ジェイはもう亡くなってしまったから何も弁解することも出来ない。不在の場で彼の残した物事について苦情を言うのは不公平だろ

う。

「世の中には浮気ばかりする男の人が多いけど、ジェイは絶対に心配ないと信じていました。…でもそんなジェイでさえ、あのような卑しい、さして美しくも無い女に手を出してしまうんだから、男の人なんてそんなに簡単なのかしら？って思いました。…そうしたら、本当に簡単でしたね。」

ナセアはサイオンとその妻に向かって、すこし毒のある表情で笑って見せた。

「どんどん側妾や愛人を増やすような人も居るのに、ジェイは生真面目でした。自分の過ちも許せないくらいに。もう少し不真面目なひとだったら、あの子達を捨ててしまうような、そんな冷酷なまねはしなかったかもしれないですね。産まれてしまったのなら、その子に罪は無いのに。馬鹿なジェイ」

気の毒ね、と微笑みながら、ナセアの頬に涙が伝っていた。

「私が産みたまかったな、ジェイの子供…。馬鹿で、いいから」
呟いてから、ナセアは黙った。とめどなく涙が出てきたからであった。

滞りなく王とセロとの対面も終わり、ナセアはセロやその母に何を告げることも無く自室に引き上げていった。

呆然とするほど、ナセアはくたびれている。王と話した時間は短かったのだが、彼女にとっては負担の多い内容だった。

ほんのひと月前までは、苦痛を避けるためにナセアの心の中から放逐されていたことばかりを、王に話したようなものであった。

「終わった…」

日没もすっかり過ぎ、夜になっていた。

ローブではないがゆったりした部屋着のままで、疲労のためかナセアは寝台で眠ってしまっていた。

夜中に窓辺で小さな音がしたときに、まだ問題があったことに気づいた。

「開けてくれ」

という、ラシヤの声である。

彼に何と告げたものだろう。その答えを見出すことが無いまま、ナセアは窓を開けてラシヤを迎え入れた。

まだ一五歳の少年は、はにかみながらも、眼を輝かせていた。彼には初めての思い、初めての異性、知り初めたばかりの愛というものに打ち込む喜びに、純粹に心を浸しているのだろう。

ナセアは、一つの傷さえ付いたことがない宝玉のようなラシヤの透き通った視線が痛いほど眩しかった。

眩しく、羨ましく、いとおしく、そしてどこかひどく、憎かった。

夜半になりいつも通り名残惜しげにラシヤは帰っていった。

次の夜も訪れるだろう。当然のようにバルコニーを登り、窓を叩くのだ。

この朝に、ナセアはグローセン男爵家が宮廷にもらっているいつもの部屋から荷物を一切引き払って、後宮へ移った。

そして、そのことをラシヤには一言も告げなかった。

ナセアは、逃げた。

やがて知るだろう彼女の様々の行動に対するラシヤの失望の眼差しから、逃げ出した。

後日、ロティオールを離れる船の上から水面の光を見ながら、少しだけナセアは泣いた。

あえて目を背けていた清らかな気持ちを思い出させてくれたラシヤへの想いと、そして何より、誰よりもナセアを愛してくれていたはずの亡き夫ジェイと過ごした日々へ想いの、決別の涙であったかもしれない。

新しい土地で、ジエイがナセアを愛してくれたように、今はまだ見知らぬ夫を愛そうと思った。大丈夫、きっと幸せになるわ。そんなことを唇の中で呟いた。

次の夜。

ラシヤはカーテンさえも取り払われた空っぽのナセアの部屋を見て、ただただ呆然とし、頭を抱えて自分の部屋へと戻って行った。

次の夜もそうだった。

ナセアに秘密だと念を押されている。周囲の誰にも彼女の行方を尋ねることは出来ない。また尋ねたところでラシヤの周囲の人間がそんなことを知っているとも考えられず、ただ、七日間、ラシヤは虚しくナセアが住いていたはずの部屋を夜半に訪れ、ただ帰ってきていた。

彼女が居ないのだとようやくラシヤが納得したときに、七日が経っていた。

このひと月足らずの間。

妙に浮き立った様子でそわそわしたり、そうかと思えば急に意気消沈したりしているラシャの様子を、彼に仕える小姓のユーレウスや近侍する兵士のディアファイユは怪訝な目で眺めていた。

だからと言って問いただしはしない。それでもラシャがどうして拳動不審なのかは、二人にも何となく見当がついていて、それゆえにこそ黙って見守っているのである。

「ラシャは好きな人が出来たんだろうねえ、ディア」

ラシャより一つ年下だが、早熟なユーレウスは口元を緩めながらそんなことをディアと話す。ディアは既に二十歳であるから、ユーレウスよりも先に気づいていた。

ただし二人ともその相手はワナンだと思いこんでいる。

ワナンに誘われて宴に出て、その次の朝、夜明け近くに帰ってきて、それからすぐにラシャの様子が奇妙になった。

それにユーレウスもディアも、ワナンの顔は見知っている。まず彼らが知る中では最も美人だろうと思っていた。ラシャが恋したのはワナンだと疑っていない。

ただ、不審なこともある。

あの子のワナンの誘う宴などにまったく顔を出しては居ない。もし彼女が恋する相手であれば、会う機会を逃すまいとするのではないかと思われるのに、である。

もともとそういう場に出たことも無く、むしろ避けて通ってきたラシャである。あの日は王の戴冠記念の式典だからこそ出席したとも言えた。

その後にはワナンの使者が届けてきた何々公爵の誕生祝だの、何々

伯爵夫人主催の音楽鑑賞会だのと言った会の招待状は一見して即座に捨てていた。行かなくて良いのかというディアやユーレウスの問いかけに、ラシヤは何故そんなことを訊くのかというような表情で、必要ないとだけ答えていた。

老練な側近でも居れば、とにかくどのような集まりにでも顔を出して人とのつながりを作り、自分の利益のために情報交換をする社交の効能に対しての必要性を述べたかもしれない。ラシヤのみならず、ディアやユーレウスも含め、彼等の年齢の若さではその辺りには疎くても仕方がない。

そんな社交などよりも、軍学校で訓練に明け暮れて肉体を駆使しているほうが楽しい年頃であつたし、ラシヤは人一倍そちらのほうが好きで性質であるのは明白だつた。

その好みを覆すほどにはワナンに惹かれていないのかな、などとラシヤの居ないところでユーレウスがひっそりとディアに呟いていた。

ところがラシヤがひと月ぶりにワナンの宴への誘いに応じた。

特に彼にとって必要とも思えないような、はるか昔の名詩人の命日にその詩を朗読するという無意味な名目の会ではあつたが、それでも出席すると彼はワナンの使者に返事をしたのである。

それにしてもワナンと言う姫は、見境無く宴に顔を出しているのだな、と今までにラシヤに捨てられた数々の招待状をみながら、ユーレウスはあきれていた。

現王のすぐ下の同腹の弟で宰相にもなれる立場のヴェアミン大公の正妃の娘で、早くも美貌が噂されるワナンと、現王の第二王子のラシヤである。ラシヤの母の身分はロティオール古い家柄で中堅程度の地位のリコリス子爵家の出身であるが、その程度の格式の差は瑕疵になるまい。

身分的にも、見た目にも、誰から見てもワナンとラシヤはお似合

いであると言われるだろう。

もつとも、ワナンの父のヴェアミン大公がそれを喜んでいないらしいということも噂になってはいた。ヴェアミンとしては、現在一九歳の王太子リデイスにこそワナンを嫁がせたがっているのだという。

もともとワナンがラシヤに初めて会ったのは、父ヴェアミンの意図があつて家族と共にリデイスの住まうレスフォを訪れ、ついでに風光明媚をうたわれるソントに立ち寄ったときであつたのだ。

それ以来、ワナンはだれかれ構わずラシヤの美貌を言い、彼に会ったときにどんな言葉を交わしたのかと語り、そしてラシヤ本人に対しても手紙を何通も書き送ったのだ。

それを受け取ったラシヤも木石ではないから、会ったときに魅力的で可愛らしいと感じたワナンからの度重なる手紙には悪い気はしていなかった節がある。しかしながら、しばらくワナンの文章を読んでいるうちに、彼には今ひとつ共感できる内容がなかったために徐々に興趣を失っていったようである。

ヴェアミン大公の意向は、リデイスと親しくなり、あわよくばワナンを口ティオール王妃にすることだったから、彼女の興味がラシヤに行ってしまったことは誤算であつただろう。ワナンは父の意向どおりに、リデイスにも多くの手紙は書いていたようだが、ラシヤへの物よりは熱を入れていなかった。

先月の王の戴冠式に着た服以外にもワナンは「宴に着て来い」とばかりにラシヤにいくつかの服を送りつけてはいたが、それらは華美に過ぎて身に着ける気持ちをしラシヤに起こさない物ばかりである。そのため、軍学校の地味な灰色の略礼装を着てワナンが誘ってきた宴に行くことにした。

たしなみとして、とディアなどに勧められて、ラシヤのほうからワナンを迎えに行ったのだが、その彼の服装を見て、ワナンが落胆したことは言うまでも無い。ラシヤが迎えに現れてからしばらくは

ぐずぐずとそのことを言い、すぐにでも着替えて欲しいとまで言い立てた。

だが「遅刻してしまうだろう」と素っ気無くラシヤにかわされ、少し慥然として彼の腕を取って部屋を出た。

それでも、宴の席に出れば、ワナンはみな視線を集めてご満悦であつた。この視線があるから宴に出ることが彼女は好きなのだ。

王女と同等の身分でありながら、王女より行動に制約が無い。その高い地位に対してほかの貴族たちは最上の敬意を払い、そして彼女の美貌と装いの素晴らしさを褒め称えてくれる。

そのうえこの日はラシヤと共に居る。彼の服装こそ誰もが知っている学校の略礼装で、灰色の生地に灰緑の縁取りという上着に黒の下裾着という地味な色あいであつたが、飾り気のない分、彼の美貌を際立たせているようだった。

ラシヤはワナンと共に人々の挨拶を受けながら、首を伸ばしてあたりをくまなく見回している。肩こそまだ華奢だが、身長は既に常の成人男性より頭一つ分は伸びているだろう。その高さで、人々を頭上から眺めおろしている。少し不遜な態度にも見えた。

ただ、彼は探しているのだ。ナセアを。だが見当たらなかった。

途端に宴への興味を失い、一応の名目である故詩人の朗読が始まったときにはあまりの退屈さに帰って良いかとワナンに問うた。しかし、ワナンが次は自分が朗読するから、と言って引き止めるので仕方なく残った。

ワナンの朗読については、どうとも評価の仕様が無かった。興味が無く聞き流しながらも、ワナンより前の人の方がまだ表情を持って語りかけてきたし声も通っていて、ましてワナンのように途中で言葉を詰まらせもしなかったと感想を持った。

朗読を終えてから、ほかの貴族たちに褒められながらワナンはラシヤの隣の席に着いて、彼の顔をうつとりと見上げている。彼からの何らかの評価が欲しいのだろう。そういう表情で居た。無言の催

促にはラシヤは答えなかった。

素直に、下手くそな棒読みだ、などと感想を述べればワナンは怒り出すかもしれないし、傷つきもするだろう。嘘の誉め言葉を述べて彼女にへつらうつつもりもラシヤにはない。彼の沈黙は、あえて傷つけることもない、という優しさであつたのかもしれない。

それからラシヤはますます退屈になり、仏頂面を隠そうとしてもしていない。それに焦燥がある。頭の中はナセアが何処に行ってしまったのかという疑問ばかりが沸いていた。秘密に、と彼女に言われた事も振り払って、大声で叫んでしまいそうな気分になっている。

ワナンとラシヤは、身分柄最も上席にいる。それゆえに人目にも立つのだが、ラシヤの苛立ちを隠さない表情は、明らかに他の客たちの興を殺いでいた。

若い娘の客は、不機嫌な顔でさえ美しいと見惚れて居たが、曰く付きの美貌の王子に興味の無い女性や、男性客などは、ラシヤの態度を不快に感じるようになっていった。だが、ヴェアミン大公の威光を背に負うワナンの手前、彼女が憧れてやまないラシヤに苦情など述べることはできない。

この日の宴は、白々とした空気が流れたままに、みながみな口数が少ないままで散会になった。

宴の会場となった某伯爵家の館から、馬車に同乗しながら、ワナンは

「お立ち寄りになりませんか？」

珍しい美味しい物を用意していますよ、とヴェアミン家の館にラシヤを招こうとした。彼と離れたくないからである。

「いや、帰ることにするよ」

ラシヤの返事はあくまで素っ気無かった。

次のワナンの宴への誘いは五日後だった。それにも行くと彼女に返事をしていた。

しかし、先の宴があまりにも退屈だったために諾としたことを後悔しても居る。

が、その場にはナセアは来るのだろうか。

もう一度、何としても彼女に会いたかったし、姿を消してしまつたことを問いたい。ラシヤの望みはそれだけだった。

昼間は、まっとうに軍学校へ行き、もやもやを発散するように剣や乗馬の訓練を熱心にこなした。夕方の、戦術の研究や新兵器の評論などの時には少し眠くなつたが、それでもあの詩の会の拷問並みの退屈さに比べればずっと面白い、と思つた。

今度の宴は、某公爵の婚約披露であつた。

ティーランから同等の身分の姫君が来たのだという。

「ティーランといえば、例のあの方、このところお見えにならないと思つたら、あちらでご再婚なさるそうですわよ。もう船もお発ちになつたところかしら」

披露目が終わり、食事も終わり、人々がいくつかの島に別れて談笑をする時間帯に、そんな話を始めた夫人が居た。そこで、ラシヤは他に行き場も無く、ワナンの傍らに立っている。彼女に相変わらず腕を掴まれていて、振りほどくわけにも行かなかつたからだ。

あの方、というのはラシヤにはまったく見当がつかなくつたが、ワナンが夫人の言葉を補足したのでわかつた。

「ああ、あの方ね。そのお話なら他でも聞きましたわ。あんな方、私のいとこの内に入るなんて嫌だわ、と思つておりましたの。でも端下女の血は争えませんのね。ふしだらな方だと思ひましたのよ、

ナセア様なんて。ようやくこの国からも居なくなるのですってね」
「先月でしたかしら。ワナン様が面罵してくださって、あの方顔色が変わったらしめたの。いい気味でしたわね」

口火を切った夫人ではない女性がその話に加勢した。

「お母様からも聞きましたのよ。本当に貴婦人の風上にも置けない方」

「ワナン様のおっしゃるとおりですわ」

「私たち淑女の敵でしたもの。ひどい方。…伯爵のお嬢様など婚約者を取られたとか」

他の女性たちも口々に言う。酷いと言いながら、どこか楽しげに。

あの宴では某国の公使、この宴では某子爵、…。いったい何人の殿方と…。

何の話だ、とラシヤは耳に入ってくる情報を頭の中で処理できずに、眼が回るような心地になっていた。誰の話だ、と思ったが、ナセアの話に間違いが無いらしい。

彼の知らない、宴に出ていたナセアの、ここに居る女性たちの眼に映った姿らしい。

あの時はしどけなく男の腕にもたれていた、このときはほとんど胸が見えそうな服を着て誰それに身体を押し付けていた、というような婦人たちのまったく下世話な報告に、まだ一四歳に過ぎない青臭い小娘のくせに、ワナンはいちいち「ぞつとしますわね」「許せませんわね」「ひどい方ね」「いやらしいこと」「なんてふしだらなのかしら」と相槌を打っている。

聞いているうちに、ラシヤは居たたまれなくなってきた。

「よせ」

と、つい口から厳しい声が出てしまった。ワナンがびく、と硬直している。

「居ない人のことをあまり悪し様に言うのは、聞き苦しいよ」

言いながらようやくワナンの手を振り解いた。

そのラシヤの袖を再び掴みながら、

「ホントのことを言ってるだけです、悪口だなんて……」

眉を寄せながらワナンが唇だけ微笑ませている。

「でもラシヤがお嫌なら、このお話はここまでにしますわ」

甘えたような上目遣いでラシヤを見上げながら、鼻声でワナンが言った。

華やかな睫毛が上を向いていて、唇が赤かった。少女なのに慣れた媚態がある。そういう表情が特に蟲惑に満ちて美しく見えると誰かに教わったかのようにだった。

「俺は帰る」

ラシヤは逆にそのワナンの女くさい表情に悪寒を覚えて、掴まれた袖を振り払って、人々を掻き分けて外へ出て行った。

ひどく目眩がするようだった。

外に出たのはよいが、来た時はヴェアミン家の馬車であつたため、ワナンと行動を異にしてしまうと、馬車がない。

物慣れた貴族ならば、同様に帰る誰かの馬車に同乗するように、従者に手配をさせるのだろうが、ラシヤにはそのような機転も無く、また彼自身の従者というものも連れてきていなかった。

ぼんやりしながら、歩いて庭園を抜け、門を通った。門番もたった一人で徒歩で通る客人など滅多に見た事が無いらしく、瞠目しながら会釈をして見送っていた。

十分に夜であつたので、あたりは真つ暗である。方向もわからない。

昼間であれば、宮殿なり遠望できたはずで、ラシヤのソント館にも行く道がわかったかもしれないが、伸ばした手の先も見えない闇では、どうにも何処へ向かっているかも判然としない。大人であれば、門番に灯りを借りたかもしれないが、ラシヤはただ呆然と方向もわからないまま脚を進めている分別の無い少年である。

周りの状況もわからず、見ようもしないままに、ただ脚が向かう方へあてもなくラシヤは歩をすすめているのである。

考えてみれば、ラシヤはナセアの何もかも知らない。ナセアに何かを訊いても、また後で、また明日、そうとしか答えてくれなかった。最後に会った夜でさえそうだった。ならばまた明日、ラシヤはそう思つて、ただナセアを求めた。

二年前にグローセン男爵の夫人として挨拶を交わし、先月は急に部屋に引き込まれて愛し合い、その行為を幾度が重ねた。ただそれだけの間柄でしかなかった。

あの場に居た女性たちが口々に言っていたふしだらな噂を、ナセアに会つて、彼女に否定して欲しいとラシヤは思った。

しかしナセアは、どうやらもうロティオールにすら居ないのかもしれないという。

何の別れも告げられず、何の前触れも無いままに、ただ前の日のとおりに愛し合つて未明に別れたその次の夜には、彼女の部屋は空になっていた。

先ほどの話では、彼女はティーランなどという他国に嫁ぐのだと言つてはないか。

彼はナセアに何度も、愛していると言つたのに、結婚したいと訴えたのに。

これからの一生のうち、もう会えないかもしれないというのに、ナセアはラシヤに何の言葉も告げなかった。

「どうしてだ……？」

ラシヤの歩調が、次第に荒々しくなっている。呼吸も乱れていた。

あまりにも静まり返った貴族の屋敷街。

叫びだしてしまいたかつたが、静寂の重さに抗う気力もなく、ただ乱暴な足取りで、ラシヤは歩いていった。

ただ頭の中にはナセアを責める言葉ばかりが浮かんている。戯れ。

裏切り。何も知らぬ愚かな子供をからかう気持ちだったのか。彼女が目の前に居たら、その言葉をラシヤは投げつけているだろう。自らの心の痛みを、ナセアに押し付けるが如く。

ナセアの危惧は正しかった。

いずれ彼女の行状に関する噂を聞くことがあれば、ラシヤは、嘘だと言ってくれ、と訴え、そうしてナセアを困らせ、清らかに傷つけるだろうという推察は、まさに正鵠を得ていたと言って良い。

ナセアの噂を少し耳にただけで動揺し、嘘だといって欲しいと胸の中で訴えているラシヤには、きっと彼女の何かを受け入れることなどではしない。

そして今のラシヤには、その自覚すらない。

だからナセアはラシヤの問いに何も答えなかった。

だから、何も告げずにナセアは去ってしまった。

だから、…。

幸いにも、ラシヤが足を向けていた方角は誤っていなかったように、空が白み始めたころ、ソント屋敷を見つけて入り、怪訝な使用人たちにも何も言わずに寝室に飛び込んで服を脱ぎ捨てて眠った。

次に目覚めたのは、既に太陽は中天に昇っているような時間であった。

使用人に、宮殿内に居るままの腹心のディアとユーレウスを呼び出すように命じ、軍学校へ向かう。

ラシヤが宮殿に来たのは、先月の王の即位記念式典に出るため、普段の拠点は領地のソントである。ソントの近くのレスフォはロテイオールにとって重要な軍港であり商業港でもあり、いくなれば副都のようなものだ。ここにも軍学校があり、ラシヤは通常レスフォの学校が本拠なのである。

王子であるから、年に数ヶ月は首都キーウ・ティアラに滞在することもあるということ、届けさえすればどちらの学校に通って

も構わないことになっていた。ラシヤは律儀にそれを守って学校に行っているが、軍学校に在籍している他の王族や貴族の若者の多数は、拠点の校にすら滅多に顔を出さないものも居る。

この日、彼が学校に向かったのは、自領のソントに帰る旨を届け出るためであつた。

ソントへ戻る道中。

普段よりずっと無口に馬に揺られるラシヤを、近侍のディアと小姓のユーレウスが、ときおり懸念を帯びた眼差しで見た。そんな視線もわずらわしく、ますます彼は無愛想になる。

途中の休憩の間に、ふと何かを思い出しては物を投げつけたり、立ち木を蹴ったり、拾い上げた枝を折ったりしている。ひどく怒っていると思えば、中空を見つめて、涙さえ浮かべているのではないかという表情をすることもある。

滞在地の宿所では、庭に出て足がもつれるまでディアを相手に剣を交えるのだ。

3泊目の宿で、ラシヤの稽古に付き合っでどろどろにくたびれたディアに、ユーレウスが話しかけた。

「ディア、大丈夫か？」

「んー、何とも言いにくいなあ」

ディアは肘にシップを巻きながら、唇の端で笑っていた。

「よく付き合うよ。ラシヤおかしいだろ、今。何があつたんだか知らないけどさ。話してくればいいのに」

「話せないこともあるんだぜ、ボウス。しいて聞くんじゃないぞ」

「じゃあディアはなんだかわかるのか？」

「お前も二・三回痛い目を見りゃわかる」

「俺は痛い目なんか見ないよ。兵士にはなんないからね」

「ばか。と言いながら、ディアはユーレウスの額を指ではじいた。

「痛いじゃないか、何すんだよ？おーいて。これぜったい腫れる」

「こつという痛い目じゃねえってんだよ」

抗議するユーレウスに、ディアは高笑いしながらもう一発をお見舞

いた。

「わかってるよ。わかってんのにもう、二回もやることないだろ！
いつてえなあ、もう！明日はもう面倒見てやらないよ？今夜出かけ
てもカギ開けてやんないよ？」

「それあ困る。頼むぜ」。花窓の姐さんたちが俺を待ってるんだよ」
「シップ巻いてるヤツが、言う？それでも行く？」

「馬鹿だなあ。ガキは。…大事にしてもらえんだよ、こついうの」
「やらしー。やだやだ」

キーウから南海道を真っ直ぐ南下し、レスフォを経由して海沿いの道を西に向かって約半日でソントである。

レスフォに着いたラシヤは、まず領主の館に向かう。

そこには兄の王太子リデイスがいる。また、ラシヤはリデイスの館の一室をレスフォの軍学校に通うための滞在用に借りている。ひとまずそこに入ることになっている。

十日間学校に行き、十日間ソントに戻る。ラシヤはそういう日常の暮らしに帰って行った。

キーウから出て、レスフォに十日間滞在してそれからようやく自領のソントへの向かう。

ラシヤが父親である王から与えられた領地のソントは、レスフォのように良港があるわけでもなく、商業が栄えているわけでもない。豊かとは言い難い土地であるが、その代わりソントにはおっとりとした美しい風景があった。果樹園と牧場と畑と、こんもりした森と、小さな漁港と、そして何よりもまばゆく青い海がある。

見慣れたはずのソントの景色が、今のラシヤの眼にはひどく優しい風景に映った。彼を育んだ風景である。

「ああ、やっぱりソントはいいなあ」

ラシヤの後ろにしたがっていたユーレウスが、深呼吸と共に言う。
のどかな声を振り返ると、ユーレウスの傍らでディアも緩やかに頷

をほころばせていた。

彼らは、何も訊かなかったな、とラシヤはふと思う。

平らな気持ちで省みると、戴冠式に出てからおよそひと月あまりの間の、ラシヤの挙動は明らかに不審だっただろう。思い起こせば羞恥に顔が火照るほどだ。

それに当初の予定では、戴冠記念式が終わればすぐにソントに戻る予定だった。

それを、ラシヤはなんと言う理由も彼らに言わず、滞在を伸ばしていた。

そのことを何故かと、ディアもユーレウスもあえてラシヤに問うことはしなかった。

今もお。

彼らの穏やかな沈黙を、ラシヤはありがたく感じた。彼の心を察し、むやみに触れることなく見守ってくれている。そういう優しさを示してくれているのだと悟ると、ひび割れた心の隙間に、温かな水が浸透したような心地になった。

いずれ二人から問われる日が来るかもしれない。今は、多分、何も答えられないだろう。問うべきは今ではないと、それも彼らはわかつているかのようだ。

踏み込むべき時を、過たずに知っている。それは思いやりなのかかもしれない。

ナセアとはどうだったのだろう。

かつてないほど密接に膚を触れ合った間柄でありながら、ラシヤは彼女が何を思っていたのかもわからず、問うてはぐらかされればそれで終わりにしてしまっていた。強いてわかつてはしなかった。今でも、ワナン達が噂していたようなひどい行状の女性がその正体とは、ラシヤには信じたくない。違う、とナセアの口から聞いたかった。理由があるならそれを知りたい。だが、今はもうそれも叶

わない。

もつと、踏み込んで問うべきだったのだろうか。

（俺は馬鹿だ）優しく開けたソントの風景から、ラシヤは目を落として俯いた。

ラシヤはただ自分が為したい事を為し、伝えたいことを訴え、ひたすらに求めていただけだった。ナセアのことを何も知ろうとせず、自分の思いだけを自分の中に必死にあふれさせていた。そんなラシヤにナセアが何も告げなかったのは当然なのかもしれない。

宮廷の人々が口にしていたナセアの「ふしだら」であるという噂を耳にした時の動揺も忘れ難い。思い出せば今でも腹の底が煮えるような心地になる。

もし、とも思う。この数日、少し考えた。

あの時に本当にナセアが居たのなら、彼女の話聞く耳が自分にあっただろうか。ラシヤは、地面を見ながら考える。

きっと、ナセアを責めただろう。責めて、罵って、彼女を傷つけたに違いない。

きっと、それさえもナセアは見抜いていたのではあるまいか。だから、黙って姿を消した。

そんな気がしていた。

あの人は複雑な人だったのだ。この数日、ようやくそう思えるようになった。

はるかに大人で、女性で、多面かつ多層に出来ていて、ラシヤはそのほんの一面にかろうじて指先を触れただけであっただろう。

もしかしたらラシヤの指先はナセアの表面を滑っただけで、その実、彼女に触れてさえ居なかったのかもしれない。

ナセアにとって彼が一時の戯れの相手だったのか、少しは愛してくれていたのか、答えを持っているはずの彼女が黙って姿を消してしまった今となっては、そんなこともラシヤには一向にわからない。

濃密に刻まれたナセアとの記憶の中で、一つ一つの行動に対して後悔が押し寄せた。

あの時はどうしてこうしなかったのか、どうしてああ言わなかったのか、どうして問いかけなかったのか、そんなことを一瞬のうちに脳に昇らせている。

もっと強いて問いかければ、もしかしたらナセアの真実に少しは近づけたのかもしれない。すさんだ行動に陥った事情も、あるいは聞く事が出来たかもしれない。問う勇気が無かった。ナセアに嫌われたくないと恐れていたのだと、今ならわかる。

後悔は、胸にも脳裏にも、あふれるほど波のように寄せては返す。だが後悔は後悔だ。それ以上の何をなせるものでもない。今なら、きつとナセアを責めることなく話を聞く事が出来るかもしれない。今なら。そう思っても、もう遅いのだ。

わずかに触れあった時間の中で、ナセアは、自らを語る相手ではないとラシヤへの評価を下した。それだけのことだった。

ナセアは帰ってこない。

ラシヤも、どれほどあがいたところで彼女と触れ合っていた時間にさかのぼることなど出来ない。

そのときそのときで、言うべきことを言い、問うべきことを問い、なすべきことを為さなければ、目の前に居る大切な誰かに大切なことを何一つ伝えられないまま、大切な誰かからの気持ちも伝えてもらえぬまま、一瞬は終わってしまう。

そしてその一瞬は、未来永劫帰ってこない。

時は帰らない。それはとても明解なことなのに、ラシヤはそれをおろそかに思っていた。

（俺は本当に馬鹿だ…）

見慣れたソントの優しい風景が、眸の中で少しこごった。途方に暮れたラシヤの背に、「さあ、もう行こう」と声がした。

遠い海が、ナセアの瞳の色に似て見えた。

おわり

あとがき

「美貌の王子と年上の女」を、最後までお読み下さってありがとうございました。

母体サイトの「春想亭」では、昔の日本を舞台にしたR18の時代小説ばかりを創っております春生が、なぜいきなりこのような架空欧風中世物など、専門外の分野に手を出してしまったのでしょうか。設定など稚拙でお恥かしい限りです。

時代物であれば、このあたりどうだったけ？なんて事はちよつとばかり文献やwebの情報を検索すれば、なるほど、という解答がちゃんと日本語で現れます。でも架空の世界であれば、これは自らの頭で創出しなければならないですよねえ。たいへんですね、これでも好きだったんです。

綺麗なドレスとか、マントとか、青い目とか、石造りのお城とか、そういう世界だって、大好きなんです。お姫様と王子様とか本当に今でも大好きなんです。シンデレラとか親指姫とか白雪姫とか、ホント好きです。

とはいえ、やっぱり、お侍と着物もこよなく愛していますが…。

サイトにて連載中に、ブログでちらりと書いたかと思いますが、この作品は、中二くらいの頃から書いては止め、やめては書いている長いファンタジー物のサイドストーリーに当たります。

そのファンタジー物とは、地名とラシャ以外はほぼ無関係なお話ですので、単体で披露することと致しました。

「愛している」といいたくて、言わせたくて、このお話を出したような気がします。

素敵な、大好きな言葉です。でも普段、公開しております和物の時代小説ではなかなか使えない言葉なのですよ。

さてさて、そろそろ作品についてお話します。

隣国と戦争中の、ロティオールという国の宮廷が舞台になります。その戦争によって夫を失った若い未亡人のナセアと、滅多に宮殿に現れなかった曰くつきの美貌の王子ラシャとの、ちょっとしたふれあいのお話。そんな感じでしたでしょうか。

恋だったのかどうか。愛だったのかどうか。それさえも定かではないようでした。

ラシャにとつては、そのときはきつと「初恋」という意識はあったのかもしれませんが…。

ナセアは、つまり戦災未亡人です。

国の物事によって、命を犠牲にした個人の、その妻という位置ですね。いつの世も、命を失う人、その家族というのは、考えただけでも辛いものだと思います。国って何だ、国境って何だ、戦争を起こす国家って何だ？と思います。本当に。

密かに、私は彼女の夫のジェイをとて好きでした。普通の良い人として創ったキャラです。

ジェイは誠実にナセアに向き合って、彼女のことをこよなく愛していたと思います。ナセアも、そんなジェイを、数年の夫婦生活の中でほのぼのと愛していたことと思います。

戦争さえなければ、きつとお互いにちょっとした愚痴を言い合いながら、幸せで平凡な生涯をまっとうできた夫婦ではなかったかと考えています。

ジェイは過ちを犯しました。その後の彼の態度は、ナセアには誠実だったのかもしれないけれども、過ちの相手には残酷だったといえます。生真面目すぎたからとお話には出しておりますが、真面目

すぎる人っていうのも困りものですね。誠実という意識も不思議な物で、一方に対して誠実であることがもう一方に対して不誠実になるといふ…。正義が必ずしも全てに対して正しいとは限らないのと同じですよ。

ジェイが命を失うことがなければ、その後もナセアに過ちを隠し続けて年月を過ごしたかもしれません。それで良いかどうかは、夫婦の間で判断することであって私はなんとも言えません。

ナセアにとっては、静かに深く愛し始めた夫のジェイの死と、その死によって一つの言い訳も聞けない状況で彼の裏切りを目の当たりにしてしまったことは、きっとものすごくショックだったと思います。多分、ジェイの子供をナセアは生みたかったのだらうと思います。彼と過ごした結婚生活の中でそんな話も何度もしたのではないのでしょうか。そうして望んでいたはずのジェイの子をナセアは授かることなく、他の女が彼の子供を産んでいたという事実が、目の前につき付けられたという状況ですね。それを知ったときに彼はもう故人であるという…。辛いですよ。もし私がその状況になったとしたら、耐える自信はありません。

だからそのことを考えなくて済むように、一人にならなくていいように、さまざまな男性を渡り歩くようになってしまった。そんな設定になっております。あるいは、自身を汚すことで、自分を愛して裏切ったジェイへの報復のような気持ちもどこかにあったのかもしれない。その行動についての是非はともかく、同情には値するかなと、そんな気持ちです。

ラシャと出会ったときのナセアは、まだジェイの死による気持ちの混乱の中に居たのではないかと思っています。

二人の出逢いとは、ナセアが、ジェイを死に追いやった無能な上司であるヴェアミンへの恨みで、その復讐として、彼の愛娘の想いのラシャを奪い取ろうと考えた、そんな状況でした。

そんな状況について、ナセアも、作者も、ラシャに対して一つも

説明していません。

大人の女性に誘惑されて、初めてそんな行為をして、好きになつて、そして黙って去られてしまったうえに、その後、彼女の不行状を他人から知らされるといふ、恋愛のみならず人間関係に疎い少年にはちよつと酷な経験だったかもしれません。気の毒でした。

傷ついたらどうなあ、なんて思っています。ははは…。いや、笑うところじゃないですね。ごめんなさい。

まあ、ナセアが置かれた状況について説明したとしても、それが少年に理解できるのかどうか、それもまた疑問ではありますが。

そのあたりを理解できる15歳がいたら、それはそれで尊敬に値するかと思いますが、ちよつと物足りないくらいの所が少年を描く楽しみでもあります。複雑な気持ちなど理解しないで居てくれたほうが、作者としては有り難いかな、なんて思っています。

ナセアは、ジェイの遺した事柄を整理して、ラシヤに黙って、海に向かうの国に出て行ってしまいました。幸せになる、と言っていたけれども、実際にどうなるかはわかりません。ただ、幸せとは誰の定義で決めるものなのかと考えると、それは自分自身の心だけが感じ取ることであるわけで、幸せになる、と能動的に考えている限り、多分、ナセアは幸せになるんじゃないかな、なんて、少しの願望を込めて思っています。

ラシヤの今後については、何とも…。

その後、誰かをまた好きになるとしても、ナセアの存在を胸の中から捨て去ることはできないのではないだろうか。そういう忘れられない存在が居ることが、今後のラシヤにとってもまた彼を好きになる人にとっても幸か不幸かは、やっぱり彼等自身が判断すること、何とも言えませんね。

この作品も、実はけつこう以前に書いたものであったと思います。前のPCで作りはじめたものかと思しますので、もう6年前くらいに

はなるかもしれません。サイトでの公開にあたり、少々に加筆修正を加えましたが、ほとんど原型のままで出しています。稚拙なところもあってお恥ずかしいのですが、面白くお読みいただけておりましたら、幸いに存じます。

何かしらお感じになったこと、ご意見や誤字脱字のご指摘などございましたら、どうぞ春生まで教えてくださいませ。
いつまでもお待ちしております。

また他の作品でもお目にかかれることを祈りつつ、とりとめのないあながきはこの辺りで失礼いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481o/>

美貌の王子と年上の女

2011年8月21日03時30分発行